

2010年10月3日仙川教会主日礼拝

大串肇牧師

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。（マタイによる福音書9・9）

主イエスは、全身まひの男性を癒して人の罪をゆるす権威あるお方であることを示されました。そのあと、主イエスはほんとうに罪をゆるす具体的なふるまいをなさる、それがマタイという徴税人を自分の弟子として召し、また徴税人や罪びとを大勢招いてともに食事をなしたのです。今朝お読みした箇所は主イエス・キリストの福音の本質をわたしたちが学ぶ上でとても大事なところです。主イエス・キリストは口先ではない、お語りになられた御言葉をほんとうに実践される。御言葉と振る舞いを通して、主イエス・キリストがほんとうの救い主である、神の権威を与えられたお方であることが指示されるからです。しかしみなさん、どうして主イエス・キリストはわたしたちの罪をゆるし、身元に招いてくださるのでしょうか。そこには深い神様の御心があるのでしよう。その神様の御心をもとめて御言葉を受け取ってまいりたいと思いません。まず、この徴税人マタイの召命物語は他の福音書にも記されています。ところがマルコ福音書ではその男性の名前は「レビ」と呼ばれています。この「マタイ」と呼ばれた人物と「レビ」が同一人物であるかどうかは確かではありません。どちらかが「あだ名」であるとも、またユダヤ人が2つの名前をもっていることも考えられない、あり得ないからであります。そもそも別の人物の物語だったのでしようか。たしかなことは、マタイ福音書が記憶しているのは、この主イエスに召された人物が徴税人であったことであり、マタイが徴税人であったという記憶でありました。徴税人が主イエス・キリストの弟子となった。主イエスの福音を述べ伝えるキリストの使徒のうちの一人が徴税人であった。これは、当時の人々にとりましては大変ショッキングな出来事であり、人々の記憶の中に、初代教会のクリスチャンの脳裏に鮮烈に刻み込まれた出来事であったのです。それは罪人と呼ばれて人々から蔑まれていた人々がキリストの福音に出会って救われることを表す、象徴的な出来事であったと言えるでしょう。しかしそれゆえに主イエスは反対され、拒否され、十字架の死を遂げねばならなかった。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

これぞ、まさしくなぜ神の子が地上に派遣され十字架の運命を担ったのかを指し示す言葉ではないでしょうか。当時、ユダヤはローマ帝国に支配されていました。ローマは植民地を支配する際、政治や文化の面では、占領した属州に比較的自由を与えていましたが、一方で重税を課していました。かれらは民の反感を恐れて、ユダヤ人にその税を徴収することを課したのです。避難や不満は徴税人たちに向けられておりました。たしかにかれらの中には不正を働いて私腹を肥やす者がいました。かれらは相当の金持ちであり、またかれらは異邦人と呼ばれていた外国人にいわば奉仕する者であり、汚れているとさえ思われていたのです。罪人というのは犯罪人という意味ではなく、宗教的な意味で神に背くものと見做された人々です。かれらは豊かであったかもしれませんが、ユダヤ人たちの交わりから孤立し孤独であったのです。マタイが収税所の前でひとり座っている光景はまさに彼の人生の風景のようであります。そのような孤独の魂を主イエス・キリストは見つめ、声をかけられたのです。それはたった一言の言葉でありました。「わたしに従いなさい」（9節）。

福音書は余計なことは一切書いていません。マタイがどういう人生をこれまで送ってきたのか。あるいはどういう境遇であったのか。しかしまさに何も書かれていないということに意味があるのです。無言のメッセージがあるのです。つまり、まったくの無条件です。主イエス・キリストに呼びかけられるために、マタイがどれだけ努力したとか、何かをなしたのか、どれくらい祈っていたのか、いい人間になったのだとか、そういう人間の側の様々な事柄は一切問われていない、関心は向けられていないのです。決定的なのはまさに主イエス・キリストの御言葉にあります。主イエス・キリストがこの人を召すという決定は、誰からも強制されたわけでも、こうしななければならない定めになっているとか、習慣であるとか規則だとか、義務ではないのです。なにもものにも縛られない主イエス・キリストの自由であり、神の主権です。

ではこの主イエス・キリストを突き動かしているのは何か。それは神様の愛なのです。マタイは取税人という仕事を辞めて改心したから主イエスに受け入れられたわけではありません。取税所の前で一人座り込んでいる、ある意味では誇らしげとは言えないような惨めで孤独な人物が、その日常の姿のまま、ありのままの姿に主イエス・キリストのまなざしは向けられたのです。そのまなざしが向けられた時、この愛の奇跡は起きたのです。まったく無条件に、ありのままわたしたちが

神様の愛の対象とされ、受け入れられ、招かれる。このキリストの愛こそが恵み深い招きの動機であり、根拠なのです。わたしたちの側に権利があるとか、当然の報いであるのではない。まさに神さまの恵みなのです。

さて次に福音書が注目しているのは、この招きにマタイがどう答えたかであります。予想通りまったく無愛想なほど簡潔です。「彼は立ち上がってイエスに従った」と。しかしこの一言でかれの人生すべてが描かれているのでしよう。彼は主イエスの御言葉を自分に語られた御言葉として受け入れたのです。しかし皆さん大事なことは、彼が立ち上がったので救われたのではなく、彼はキリストに招かれたからこそ立ち上がったのです。彼が立ち上がることができたのは、キリストに促され、支えられて、ただキリストに従っただけなのです。こうして信仰とはキリストの招きの声を聞き、その御言葉に答えて生きることなのです。こういうキリストの交わりに生きることなのです。

さて、主イエスが徴税人や罪人とともにイエスや弟子たちと一緒に食事をしていたというのです。ともに食事をするというのは、そこにひとつの交わりが生まれていることを指し示しています。しかしそこに宗教的な指導者であるファリサイ派の人々は弟子たちに、主イエスは「なぜ徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と非難したというのです。ある意味で彼らの非難は常識的なものです。主イエスが取税人や娼婦、異邦人などと一緒に食事をするという光景は、当時のユダヤの人々から見れば、常軌を逸したような光景でした。とても受け入れられない、社会から拒否された人々だったからです。しかし主イエスはファリサイ派の人々にこういわれたのです。

「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしを求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行つて学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。**」

確かにファリサイ派の人々の訴えている「正しさ」にも一理あります。彼らもまた聖書のみ言葉を聞き、それに忠実に従うことを重視しました。しかしかれらの主張は形式ばかりにとられ、自分たちだけが優れた者であると誇り、病人や貧しい人や外国人を軽蔑し差別していたのです。ですから彼らは罪人と食事をする主イエスをも許せなかったのです。

しかしながら主イエスは旧約聖書の預言者ホセアの言葉を引用して神様が求めているのは、隣人を「犠牲」にして自分の正しさ、自分の救いを追求するのではなく、神様がわたしたちを憐れんでくださったようにわたしたちも互いに愛し合うこと、憐れみをもってふるまうことを主イエスはユダヤ人たちの指導者に語ったのです。これはかつてのユダヤ人の指導者の問題ではなく、マタイによる福音書の教会にとつて、現実味を持った言葉として語られているのです。とい子のはまさにユダヤ人と異邦人が混成し、敵意や偏見を乗り越えるべき課題を担っていたマタイ福音書の教会が聞いた御言葉なのです。

わたしたちは忘れてしまうのです。わたしたちは救いを勝ち取ったのではなく、救われた者であることを。わたしたちは神様の前にあっても胸を張って生きていたからキリストに招かれたのでありません。神様がわたしたちを憐れんでくださり、主イエス・キリストを遣わしてください。わたしたちの汚れた世界へ、孤独や悲しみにみちた現実のただなかに主イエス・キリストは生まれ、ついにはそのどん底でわたしたちの罪の身代わりに尊い命を捧げられたのです。こうしてわたしたちは救われたのです。

この十字架こそ、神様がわたしたちを愛してください。この十字架の刻まれた交わりに、わたしたちは正しかったからではなく、むしろふさわしい者ではなかったからこそキリストに招かれたのです。

たしかに食事をするには、お互い気の合う者だけが親しく食事をするのであれば楽しいかもしれませんが。快適かもしれません。そういう気の合うものだけの交わりの中にくつろいでいまいでしようか。教会が外に向かって果敢に伝道する、まだまだ福音を知らない大勢の人々に、直面する試練や困難を恐れずに福音を宣教する力が生まれてこないのです。もしそうならばいっしかわたしたちもファリサイ派の人々と同じようになってしまいます。御言葉を聞いて従うことは頭ではわかってはいても、実際の生活の中では他者を見下したり、傲慢になってしまったりしてしまうのではないのでしょうか。しかし、神様が求めているのは、隣人に対する憐れみであって犠牲ではないのです。

みなさん、わたしたちが招かれているのは世の交わりではありません。罪のゆるしが約束されたキリストの十字架の交わりです。わたしたちが招かれている食事は、復活と永遠のパンが約束された神の食事、聖餐なのです。キリストの洗礼と聖餐へどんな人でも招かれています。この福音を宣べ伝えることこそ、教会がこの世にある意味であり、使命なのではないでしょうか。

宣教45周年を迎えた仙川教会が、地の果てまでも福音を宣べ伝える教会として、ますますその使命に立って歩むこと、隣人を愛する共同体としてさらなる成長をなすことを心から祈りましょう。